

ヨハネ伝における3の概念について

竹島 俊之

0. ペテロがイエスを三度否認することは有名な話である。しかし、それだけでなく、その他ヨハネ伝にはさまざまな形で「三」という概念が現われている。それを実証的に説明してみよう。

1. イエスを三度否認する話。

イエスはペテロが三度自分を否認することを予告する。

「イエスは答える。あなたはあなたの命を私にかけようと言うのか、よくよく言うておく、雄鶏がなく前に、三度否認するだろう」

(第13章38節)

イエスが逮捕されて、司祭長の家に連行され、ペテロともう一人の弟子がついて行く。司祭長と知り合いだった、もう一人の弟子は一緒に中に入って行く。ペテロは外で門の所に立っている。ペテロが出てきて、門番の女に何か言って、ペテロを中に連れて入る。その時に門番の女がペテロに言う。

「あなたもこの人の弟子たちの一人ではないのか」。その人は言う。

「私はそうではありません」(第18章17節)

シモン・ペテロが召使たちと一緒に焚き火で暖まっていると、

「お前もあの弟子たちの一人ではないのか」とかれらは言った。その人は否認して言った「私はちがいます」(第18章25節)

司祭長の僕の一人で、ペテロが耳を切った者の親戚の者が言った「お前が庭で彼といるのを私は見なかっただろうか」ペテロはふたたび否認した。するとすぐに雄鶏がなかった。(第18章26節、27節)

2 最初に奇跡を現わした日は悟りを開いて世に戻って来て三日目であ

る。

「三日目にガリラヤのカナで婚礼があった」（第 2 章 1 節）そしてこの婚礼の宴の席で酒がなくなり、水をぶどう酒に変えるという奇跡を行う。

これが三日目であることをヨハネ伝の記述をたどってみると次のようになる。

ヨハネのあかし。

「ヨハネは彼についてあかしをして叫んで言う。この人が私が言っていた人です。私の後に来るこの方は私より優れた方である。私よりも先におられたからである」（第 1 章 15 節）

「その翌日、ヨハネはイエスが自分の方に来られるのを見て言った。見よ、世の罪をとり除く神の子羊、この人が私が言っていた人です。私の後に来られる方は、私よりも優れた方である。私よりも先におられたからである」（第 1 章 29、30 節）

— 世に出て一日目 —

「その翌日、ヨハネは二人の弟子たちと一緒に立っていたが、イエスが歩き回っているのを見て言った。見よ、神の子羊。その二人の弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いてついて行った」（第 1 章 35 節）

— 二日目 —

「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされたが、フィリッポスに出会った」（第 1 章 43 節）

— 三日目 —

「三日目にガリラヤのカナで婚礼があった」（第 2 章 1 節）

3. 食料に関して三つの奇跡が行われる。すなわち第 2 章では水をぶどう酒に変える奇跡が、第 6 章では五千人にパン(主食)を与える奇跡が、第 21 章では大漁の魚(副食物)をとる奇跡が語られる。

4. イエスは死者の中からよみがえって弟子たちに三度姿を現わす。

— 一回目 —

「イエスは彼女に言う、女よ、なぜ泣いているのか、誰を探しているのか。彼女は庭師かと思って、ちょっと、もしあの人を運んだのなら、どこに置いたのか言ってよ、私も運ぶんだから。イエスは彼女に

言う、マリア」(第 20 章 15,16 節)

そしてその日の晩に弟子たちに現われる。

— 二回目 —

最初にイエスが現われた晩に居合わせなかったトーマスに他の弟子たちが「主に会ったよ」と言ったのに対して、トーマスは言う、「彼の手に釘の痕を見、釘の痕に指を入れ、彼の腹に私の手をいれなければ信じないと」。八日後、ふたたびイエスは弟子たちに現われて、トーマスに向かって、「お前の手をもってきて、私の腹の中に入れて見なさい」と言う。そして、私の主、私の神と言ったトーマスにたいして、「私を見たから信じたのか、私を見なくて信じた人は、幸いなり」と言う。(第 20 章 26 節～29 節)

— 三回目 —

「イエスが死者の中からよみがえり、弟子たちに姿を現わしたのはこれで三度目である」(第 21 章 14 節)

5. そこで彼らは彼を十字架にかけた。彼と共に他の二人を、こちらとあちらに、そして真ん中にイエスを。(第 19 章 18 節)

6. イエスに殉教するペテロは三人目の弟子である。

「ヨハネから聞いて彼について行った二人のうちの一人はシモン・ペテロの兄弟アンドレアであった。彼はまず自分の兄弟シモン・ペテロに会って、言う。私たちはメシア—これはキリスト(香油を塗られた人)と訳される—に会ったよ。かれをイエスのところに連れて行った。彼を見て言った。お前はヨハネの子シモンだ。お前はケファと呼ばれる。これはペテロと訳される」(第 1 章 40～42 節)

7. 言語表現上でも「三」という概念はさまざまな形でヨハネ伝の中に現われている。

7.1. 役人たちがユダの導きでイエスを逮捕するためにやって来たとき、イエスが「私だ」という表現が三度使われている。

「彼は出て行って、彼らに言う、誰を探しているのか。彼らは彼に答えた、イエスだ、ナザレ人の。彼は彼らに言う、私だ」(第 18 章 4

—5 節)

「彼が彼らに、私だ、と言ったとき、彼らは後ろに退いて、地面に倒れた」(第 18 章 6 節)

「イエスは彼らに答えた。私はあなた方に言った、私だ、と」(第 18 章 8 節)。

7.2. 8 章において「あなた方はあなた方の罪で死ぬだろう」という表現が 3 回使われているが、有標と無標という語順の対比がみられるので原文をあげておこう。

καὶ ἐν τῇ ἁμαρτίᾳ ὑμῶν ἀποθανεῖσθε (第 8 章 21 節) F (-)

ὅτι ἀποθανεῖσθε ἐν ταῖς ἁμαρτίαις ὑμῶν. (第 8 章 24 節) F (+)

ἐὰν μὴ πιστεύετε ὅτι ἐγὼ εἰμι

ἀποτανεῖσθε ἐν ταῖς ἁμαρτίαις ὑμῶν. (第 8 章 24 節) F (+)

無標の文中では「罪」が単数なのに対して、有標の文中では「罪」は複数であり、個々の「罪」が表象されていることも注意すべきことであるように思われる。

7.3. μικρὸν καὶ οὐκέτι θεωρεῖτε με, καὶ πάλιν μικρὸν
καὶ ὄψεσθέ με

しばらくすると、あなた方は決して私を目にしない
そしてまたしばらくすると私をまた見るだろう
(第 16 章 16 節)

この表現はさらに続けて二回繰り返される。

εἶπαν οὖν ἐκ τῶν μαθητῶν αὐτοῦ πρὸς ἀλλήλους.
τί ἐστιν τοῦτο ὃ λέγει ἡμῖν. μικρὸν καὶ οὐ θεωρεῖτε
με, καὶ πάλιν μικρὸν καὶ ὄψεσθε με.

彼の弟子たちはたがいに言った。「彼が言うこれは何だろう。しばらくするとあなた方は決して私を目にしないそしてまたしばらくすると私をまた見るだろう」
(第 16 章 17 節)

περὶ τούτου ζητεῖτε μετ' ἀλλήλων ὅτι εἶπον. μικρὸν

καὶ οὐ θεωρεῖτε με, καὶ πάλιν μικρὸν καὶ ὄψεσθε με.

しばらくするとあなた方は決して私を目にしない、そしてまたしばらくすると私をまた見るだろう、と私が言ったことについておたがいに尋ね合っているのか。

(第 16 章 19 節)

- 7.4. 「私は彼に何の罪も見いだせない」という表現も三度使われている。

ἐγὼ οὐδεμίαν εὕρισκω ἐν αὐτῷ αἰτίαν. (第 18 章 38 節)

οὐδεμίαν αἰτίαν εὕρισκω ἐν αὐτῷ. (第 19 章 4 節)

ἐγὼ γὰρ οὐχ εὕρισκω ἐν αὐτῷ αἰτίαν. (第 19 章 6 節)

- 7.5. , καὶ οὐκέτι εἶμι ἐν τῷ κόσμῳ, καὶ αὐτοὶ ἐν τῷ κόσμῳ εἰσίν,

(第 17 章 11 節)

私は決して世にいないのです、そして彼らは世にいるのです。

これと同じような表現が二回くりかえされる。

ἐγὼ δέδωκα αὐτοῖς τὸν λόγον σου καὶ ὁ κόσμος ἐμίσησεν αὐτούς, ὅτι οὐκ εἰσίν ἐκ τοῦ κόσμου καθὼς ἐγὼ οὐκ εἶμι ἐκ τοῦ κόσμου. (第 17 章 14 節)

私は彼らにあなたの言葉を与えました。そして世は彼らを憎みました。彼らがこの世からの者ではないからです。私がこの世からの者でないように。

ἐκ τοῦ κόσμου οὐκ εἰσίν καθὼς ἐγὼ οὐκ εἶμι

ἐκ τοῦ κόσμου. (第 17 章 16 節)

彼らはこの世からの者ではないのです、私がこの世からの者ではないように。

7.6. イエスがシモン・ペトロに三度「愛しているか」と尋ねる。

「彼にふたたび言う、ヨハネの子、シモンよ、私を愛しているか。彼は言う、はい、主よ、あなたを愛していることはご存知のはずです。彼に言う、私の羊を養いなさい。三度目に言う、ヨハネの子、シモンよ、私を愛しているか。ペテロは悲しくなった。三度愛しているかと言われたから」(第 21 章 15～17 節)

7.7. 3 項動詞

ギリシャ語では行為の主体を表す人称代名詞の主格はゲルマン語とは違って表出されない。そして動詞句はこれまでさまざまな論文で論証してきたように動詞で始まる有標の動詞句 (+) と動詞で終る無標の動詞句 (-) が基本構文なのである¹⁾。

μή	Neg.
<u>ταρσασέσθω</u> ὑμῶν ἡ καρδιά.	F (+)
<u>πιστεῦετε</u> εἰς τὸν θεόν	F (+)
καὶ	
εἰς ἐμὲ <u>πιστεῦετε</u> .	F (-)
ἐν τῇ οἰκίᾳ τοῦ πατρὸς μου μοναὶ πολλαὶ <u>εἰσιν</u> .	F (-)
あなたがたの心を乱すことがないように。神を信じなさい、そして私を信じなさい。私の父の家にはたくさんの家があるのです。	
(第 14 章 1, 2 節)	

次の文には有標の定動詞句と無標の定動詞句の美しい交替が見いだされる。

καθὼς <u>ἠγάπησέν</u> με ὁ πατήρ,	F (+)
καγὼ ὑμᾶς <u>ἠγάπησα</u> .	F (-)
<u>μείνατε</u> ἐν τῇ ἀγάπῃ τῇ ἐμῇ.	F (+)
ἐὰν τὰς ἐντολάς μου <u>τηρήσητε</u>	F (-)
<u>μενεῖτε</u> ἐν τῇ ἀγάπῃ μου.	F (+)
καθὼς ἐγὼ τὰς ἐντολάς πατρὸς μου	
<u>τετήληκα</u>	F (-)
ταῦτα <u>λελάληκα</u> ὑμῖν	F (+) m

ἵνα ἡ χαρὰ ἡ ἐμῆ ἐν ὑμῖν ᾤ

καὶ

ἡ χαρὰ ὑμῶν πληρωθῆ

父が私を愛したように、私はあなた方を愛した。

私の愛にとどまりなさい。もし私の掟を守る

なら、あなた方は私の愛に留まるでしょう。

私が父の掟を守って、彼の愛に留まっている

ように。このことをあなた方に言ったのは私の

愛があなた方の中にあるためであり、あなた方の

愛が満たされているためである。

(第 15 章 9,10,11 節)

そして動詞が最大の項をとる 3 項動詞の場合、動詞は多くの場合真ん中に位置し、このためにヨハネ伝の文体は非常に均衡のとれた、美しい印象をあたえる。それはすぐにギリシャの彫刻美を思い浮かばせるほどである。

3 項動詞が真ん中の位置をとることが文体論的要因であることは次の文がよく示していると思う

καθὼς ἐμέ ἀπέστειλας εἰς τὸν κόσμον

F (+) m

καγὼ

ἀπέστειλα αὐτοὺς εἰς τὸν κόσμον. 17,18

} Theme
F (+)

あなたが私を世に送ったように、私も彼らを
世に送りました。

3 項動詞が真ん中の位置をとり、文体論的に際立っている例として次の文を挙げておこう。

ταῦτα λελάληκα ὑμῖν

F (+) m

ἵνα μὴ σκανδαλισθητε

F (-)

ἀποσυναγωγούς ποιήσουσιν ὑμᾶς.

F (+)

ἀλλ' ἔρχεται ὥρα

F (+)

ἵνα πᾶς ὁ ἀποκτεῖνας ὑμᾶς

P (+)

δοξῆ

λατρείαν προσφέρειν τῷ θεῷ

[Ca (+)
I (+) m

こういうことを私が語ったのは、あなた方が
つまずかないためです。かれらはあなた方を
会堂を追われる人にするでしょう。しかも
あなた方を殺すすべての人が神に奉仕をする
と思われる時がくるのです。

(第 16 章 1,2 節)

ταῦτα <u>λελάληκα</u> ὑμῖν	F (+) m
παρ' ὑμῖν <u>μένων</u> .	P (-)
ὁ δὲ παράκλητος, τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον,	} Theme
ὁ <u>πέμψει</u> ὁ πατὴρ ἐν τῷ ὀνόματί μου	
ἐκεῖνος	} R (+)
ὑμᾶς <u>διδάξει</u> πάντα	} Theme
καὶ	} F (+) m
<u>ὑπομνήσει</u> ὑμᾶς πάντα	F (+)
ἃ <u>εἶπον</u> ὑμῖν ἐγὼ.	R (+)
εἰρήνην <u>ἀφήμι</u> ὑμῖν,	F (+) m
εἰρήνην τὴν ἐμὴν <u>δίδωμι</u> ὑμῖν.	F (+) m

こうしたことをあなた方の間に留まって述べた。
しかし、弁護士、すなわち父が私の名において
送るであろう、聖霊があなた方にすべてを教え
るでしょう。そして私があなた方に言ったすべ
てを思い出させるでしょう。

平安をあなた方に残しておく。私の平安をあなた
方にあたえる。

(第 14 章 25,26,27 節)

ταῦτα	} Theme
ἐν παροιμίαις <u>λελάληκα</u> ὑμῖν	
<u>ἔρχεται</u> ὥρα	F (+) m
ὅτε οὐκέτι	F (+)
ἐν παροιμίαις <u>λαλήσω</u> ὑμῖν,	} Neg.
ἀλλὰ παρρησίᾳ	} F (+) m
	Adv.

περὶ τοῦ πατρὸς ἀπαγγελῶ ὑμῖν.

F (+) m

こうしたことを比喩であなた方に語ってきた。
比喩ではあなた方に語らず、明瞭に父について
あなた方に語る日が来る。

(第 16 章 25 節)

8. 天と地と冥府の世界を巡って繰り広げられる神話の世界。アレクサンドリア時代にホメーロスの『イリアス』、『オデュッセイア』を精確に伝承するために発達した文献学のなかでの記述用語、すなわち男性、女性、中性による名詞の性の区別、1 人称、2 人称、3 人称という人称の区別、動詞の能動相、中動相、受動相という相の区分、単数、複数、双数という数の区分の中にも 3 という概念が現われている。

問題なのは過去、現在、未来という時制の区分である。これは時間の流れを考えた場合の人類の普遍的な考え方であって、ギリシャ語文法の時制区分がそれを基礎にしているとはとても考えられないのである。すなわち、過去の事柄に関わる表現についても単純過去（アオリスト）、未完了過去（過去進行形）、現在完了、過去完了という時の流れとは次元の異なる概念を持ち込んでいるのだから。さらに未来形もそれが話し手の「意志」を表出するのに重要な時制だからこそ、一つ一つの動詞についてその形が明記してあるのだと思われる²⁾。

ギリシャ語文法の時制論の特徴は本時制語尾、副時制語尾という時制語尾の区別が明瞭に示しているように二分法が基礎なのである。そしてこれはヴァインリヒが『時制論』³⁾の中で展開している「説明の時制」と「語りの時制」の区分と一致している。時制は個々の言語について、もう一度検討してみなければならない重要な問題であると私は考える。

以上考察してきたように、明らかにヨハネは 3 という概念を意識していると思われる。そしてこの 3 という数にはこれまでさまざまな論文の中で主張してきたように構造的な性質があり、動詞句において主格をとらない言語においてその語順を考える場合に非常に大きな要因であることを改めて主張しておきたい。

最後にヨハネ伝の終結部ともいえる第 20 章 30、31 節を構文分析しておこう。この場合形容詞、属格が修飾する名詞の前に置かれる語順

(収斂的語順) を <・> で、後に置かれる語順 (展開的語順) を ・< で表記する。

πολλά μὲν οὖν ἄλλα σημεῖα ἐποίησαν F (+) m

< A A ・N >

ὁ Ἰησοῦς

ἐνώπιον τῶν μαθητῶν αὐτοῦ,

N ・< G

ἃ οὐκ ἔστιν γεγραμμένα ἐν τῷ βιβλίῳ τούτῳ. R (+)

N ・< DP

ταῦτα δὲ γέγραπται F (-)

ἵνα πιστεύσητε Ca (+)

ὅτι Ἰησοῦς Theme

ἔστιν ὁ χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ, F (+)

N ・< G

Καὶ ἵνα πειστεύοντες P (+)

ζωήν ἔχητε ἐν τῷ ὀνόματι αὐτοῦ. F (+) m

N ・< G

多くの他のしるしをイエスは彼の弟子たちの前で行った。それはこの書には書かれていないものである。これが書かれたのはイエスがキリスト（香油を塗られた人）であり神の子であることをあなた方が信じるためであり、そして信じて彼の名において命を持つためである。

* 本稿は 2003 年 9 月 27 日、広島大学で開催された第 14 回日本ギリシア語ギリシア文学会研究発表会において口頭発表したものに、加筆・修正したものである。

1) 古典ギリシア語の構文論研究 (2) 『プロピレア』第 14 号 2002 年、20 頁以下。

2) 「古典ギリシア語における未来時制についての一考察」『言語文化研究』広島大学総合科学部紀要 V 第 10 巻 1984 年 212-232、「現代ギリシア語の瞬時態未来と継続態未来についての一考察」『プロピレア』第 2 号 1990 年 12-27、『プロピレア』第 14 号 31 ページを参照。

3) H・ヴァインリヒ『時制論』紀伊国屋書店 1982 年

Über den Begriff „drei“ im Evangelium nach Johannes

Toshiyuki TAKESHIMA

Die Erzählung, daß Simon Petrus Jesus dreimal verleugnet habe, bevor der Hahn krächte, ist sehr berühmt. Ich habe in dieser Abhandlung nachgewiesen, daß im Evangelium nach Johannes auch anderswo die Numerale drei gebraucht worden ist, und Johannes sich deutlich dem Begriff des Numerale drei bewußt war und diese Tatsache sich in der Struktur seiner Sprache zeigt.

Das erste Zeichen, daß Jesus Wasser in Wein verwandelte, wurde am dritten Tag in Kana in Galiläa getan.

Drei Zeichen mit Nahrung wurden getan, der Wein (zweites Kapitel), das Brot (sechstes Kapitel) und der Fisch (einundzwanzigstes Kapitel).

Jesus ist den Jüngern drei Mal offenbart worden, nachdem er von den Toten auferstanden war.

Jesus wurde mit zwei anderen gekreuzigt. (19,18)

Simon Petrus ist der dritte Jünger, und er ist Märtyrer geworden.

Auch in der sprachlichen Struktur zeigt sich öfter der Begriff des Numerale „drei“.

Als Jesus verhaftet wurde, hat er drei Mal gesagt, „Ich bin's“ 18,4; 18,6; 18,8.

Man kann die Ausdrucksweise drei Mal finden, „ich finde keine Schuld an ihm“ 18,38; 19,4; 19,6.

Das Verb, das drei Valenzen verlangt, ist oft in die Mitte eines Satzes gesetzt worden, und das ergibt einen das Gleichgewicht haltenden Stil.

Ich habe daraus den Schluss gezogen, daß Johannes sich des Begriffs des Numerales drei bewußt war.